

「日本建築の成立」  
コーネル大学における妻木頼黄の卒業論文について  
その翻訳と解題

清水慶一<sup>1</sup>・松波秀子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>国立科学博物館

<sup>2</sup>清水建設技術研究所

A Thesis on the Growth of Japanese Architecture  
—On the Thesis of Yorinaka Tsumaki in Cornell  
Explanatory Note and Translation—

By

Keiichi SHIMIZU<sup>1</sup> and Hideko MATSUNAMI<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Science and Technology, National Science Museum, Tokyo

<sup>2</sup>Construction Engineering Research Dept., Institute of Technology, Shimizu Co., Tokyo

**Abstract**

Yorinaka TSUMAKI is a Japanese Architect taking an active part in Meiji Era. He played great role about the transfer of western architecture. Especially he was the central figure of the construction organization in Government. He had a great influence on the development of modern Japanese architecture, because construction industry of government was a large part of western building.

A lot of study reports about him was published, as reason why TSUMAKI had taken the great role on the development of modern Japanese architecture. It was one of a short report of his young age career to be published by first author of this paper in 1990. This report was studied on the situation of TSUMAKI staying in United States of America which was based upon materials being stocked in Cornell University.

On finding TSUMAKI's Thesis in its archives, first author think his thesis the good material on the Japanese architectural history as follows;

- 1) His thesis is a precious material to study on TSUMAKI's outlook of the architecture in his young age.
- 2) This shall be given us some important information how the history of Japanese architecture was understood in early of Meiji Era.
- 3) This will be a good material for the study about the cultural transfer between Japan and US by analysis how TSUMAKI introduced the Japanese architectural history to foreigner when Japanese culture was not so well known in US.

We translate this thesis to Japanese, and write explanatory notes on the background of it.

## 〈解 題〉

### 序

妻木頼黄は日本の近代建築の発達の上で、大きな足跡を遺した建築家である。この建築家については、これまで数多くの研究や著書が発表されており、その履歴に関しては、ここで詳細に取り上げる必要もないであろう<sup>1)</sup>。だが、彼の青年期の履歴に関しては従来の研究では判然とせぬところがあり、清水は昭和62年に彼が卒業した米国のコーネル大学において、妻木に関する資料の調査を行った。この結果に基づき「コーネル大学所蔵の小島憲之、妻木頼黄に関する資料について」及び「妻木頼黄の初期の履歴について」という発表を行った<sup>2)</sup>。

このコーネル大学での調査の折り、同大学の資料館には妻木の卒業論文が遺されていることを知り、これを閲覧する機会を得た。この論文は主として日本の古代からの建築の発展を記したものであり、単に妻木の初期の事跡を知る上で、重要な資料となるばかりではなく、明治10年代に我が国の建築の歴史が如何に捉えられていたかを示す数少ない資料と考えられる。そこで、妻木の卒業論文の翻訳を掲載し、併せてこの論文に関する解題を付するものである。

なお、執筆に当たっては、「解題」は清水が記し、「翻訳」に当たっては清水と松波が共同で行い正確を期することにした。

### 1. 初期の妻木頼黄の経歴について

これまでの、研究によって得られた、妻木頼黄の初期の経歴の概要を記せば、次のようになろう<sup>3)</sup>。

妻木頼黄は安政6年(1859)12月10日、江戸赤坂に千石取りの旗本の子として生まれる。文久2年(1862)、父逝去。明治5年、母逝去。13歳で孤児となる。明治7年、東京外国語学校英語学下等第4級に在学。この頃、工部省で送電術を学んだと言う。明治8年、慶応義塾入塾。明治9年、米国行きのために退塾する。

明治9年春、第1回渡米。ニューヨーク在住。昼は佐藤百太郎の店を手伝い、夜は夜学に通う。明治10年、帰国。朝比奈一長女みなと結婚。

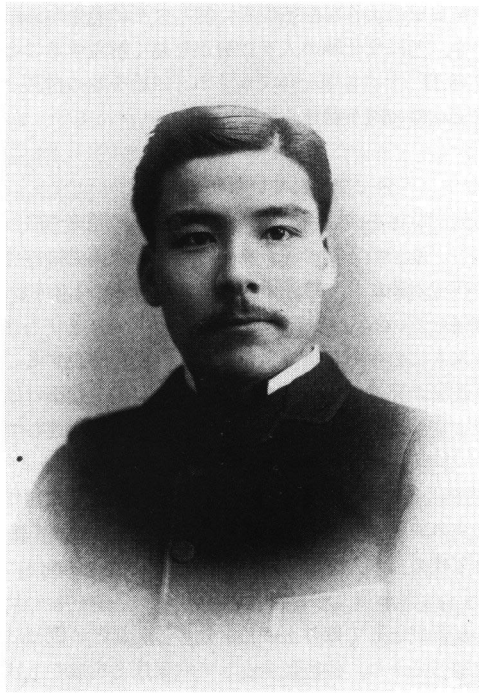
明治11年、工部大学校造家学科に入学。明治14年、試験好成绩につき賞与の書物を贈られる。同年5月、コンドルの指示により皇居造営の現場で実務の修行。明治15年4月、試験好成绩にて賞与の書物を贈られる。5月、北白川宮邸新築現場で実習。

明治15年(23歳)7月、アメリカ留学のため、工部大学校を退校。8月、ニューヨーク州イサカのコーネル大学3年次に編入。明治17年5月、コーネル大学卒業。卒業論文「A Thesis on the Growth of Japanese Architecture」。なおこの論文は、メリットアンドリーダ卒業論文賞を受けた。

卒業後、R. H. ロバートソンとC. フェイファーの建築事務所で実地修行。明治18年5月、ヨーロッパを回り、同年9月、帰国した。帰国後、11月東京府御用掛を皮切りに、日本の建築界での活躍を開始する<sup>4)</sup>。

以上が、初期の妻木頼黄の足跡である。以上のごとく、コーネル大学編入に際して、妻木は初めてアメリカを訪れたわけではなく、明治9年から、10年にかけて、約1年余りアメリカに滞在し、明治11年5月から15年7月まで4年余り工部大学校に在学した後、コーネル大学に編入学したのであった。

当時、工部大学校では明治10年1月に来日したJ. コンドルによって、建築学の講義が本格的に開始された時期であった。明治10年に作成された『工部大学校学課並諸規則』<sup>5)</sup>によれば、修業年限は予科2



参考図 コーネル大学留学時の妻木頼黄（コーネル大学所蔵）

年，専門科2年，実地科2年の計6年であり，妻木は専門科修了後，現場実習の始まる以前に退校したと言えよう。

妻木は，工部大学校から学業成績証を受け，コーネル大学建築学科に編入学したとされる。同校建築科には既に，明治8年に小島憲之が入学，明治12年に卒業していた<sup>6)</sup>。妻木は，前述のごとく，明治15年にコーネル大学に入学したが建築科過程4年の内，3年次に編入学したのであった。

コーネル大学建築科は，明治3年，土木学科の一課程として設けられ，同年秋に建築家バブコックが教授に就任して以来，教育内容が整えられた<sup>7)</sup>。一般に19世紀中頃のアメリカでは体系的な建築教育を行う大学は殆ど無く，建築学科を初めて設けたのは1865年のマサチューセッツ工科大学が初めてとされる。コーネル大学建築学科はこれに遅れること6年であり，アメリカにおいては最も初期に設立された建築学科であると言えよう。

現在，コーネル大学に残る妻木に関する記録は，在籍カードと顔写真，及び卒業後日本から送った業績表，及び今回取り上げる卒業論文である。その他，卒業設計が含まれるものと思われるが，本調査によっては発見できなかった。

## 2. 妻木のコーネル大学卒業論文

妻木の卒業論文に付けられたタイトルは“A Thesis on the Growth of Japanese Architecture”であり，訳すれば「日本建築の成立」となるであろう。この表題のように妻木は日本の建築の発達について，社

寺仏閣のような宗教建築、屋敷民家のような住宅建築に関してその発生から、成立の過程、そして如何なる特徴を持つものであるかを、西洋文化圏の人々に分かり易く解説することを試みた論文であった。

彼の論文は表紙を含み、約 48 頁。手書き筆記体で記され、口絵を始め付図として十数点の写真が掲載され、また手書きの簡単な建築細部の図が載せられている。

論旨は冒頭に、

「ごく最近まで、日本の歴史は世界に知られていなかった。

しかし我が国が外国との通商関係を成立させてからは、日本の歴史や旅行書が広範に出版されるようになった。しかしながら、欧米の言葉で書かれたわが国の建築史における未だほとんど無い。このようなわけで、これを研究対象にして論述するように努めることとし、諸氏が（このテーマに）興味を持たれるものと確信している。」

と、記したように基本的に欧米人に日本の建築の発達を分かり易く解説することを目的としていた。

しかし、内容は単なる日本建築の発達を記したのではなく、日本の建築は如何なる構造的な特徴を持ち、装飾がなされ、日本の風土や暮らしとどのような関わりのもとに発達してきたかを出来る限り明らかにしたものである。

もとより、当時の日本の建築の歴史は今日のように詳細に分析され検討されたものではなかった。従って、今日の日本建築史研究の成果より見れば妻木の論考は首を傾げざるを得ない部分も多い。しかし、総合的に見れば、明治 10 年代の日本人建築家が自国の建築の歴史を如何に認識していたかを示す良好な資料と言えよう。

なお、妻木が日本の具体的な事例として取り上げた、社寺仏閣などの例は、伊勢神宮を除くほか殆ど東京あるいは日光などの関東地方であり、住宅は主として武家住宅を取り上げるなど、彼の出身と行動範囲が強く影響している。

一方、文中で妻木は伊勢神宮、芝増上寺や浅草寺等の建築をかなり詳細に解説している。これらは、当時、日本の建築家がこのような社寺建築を如何に捉えていたかを示すばかりではなく、当時の社寺建築の建築的な状況を知る上で多くの示唆を与えてくれるものと思われる。

では、なぜ妻木がこのような日本の建築の歴史について記そうとしたのか、この点については彼が論文の最後に記している、次のような結論が一つの解釈を与えてくれるかも知れない。彼は、日本人とその建築の歴史について

「日本人が他の国のことを知らなかった頃は、自国の芸術に誇りを持ち、それは卓越したものだと考えていた。」

しかし、開国・文明開化によって他の国の、具体的にはヨーロッパの建築を知るようになると、「自国の壊れやすい木造の構築物を劣ったものと考えようになった」と言う、そして、現在は自国の建築を改善していく途上にある。と位置づけ、今後、新しく導入された西欧建築を採り入れ完璧な建築を造り上げていくに違いないと言うのである。

妻木がこの論文を記した時期は、未だ混沌の時代だったと言えよう。西洋建築がこれからの時代の主流となること、それを設計するのは自分たち工部大学校の学生であるのは確かだったが、では彼らの国にとって固有の建築とは何かという、よって立つところははなはだ曖昧な時代だったと言って良い。このような、次代の日本の建築を背負うことを期待された若者にとって、自分の国の建築の歴史、その起源と、発展、特徴に解釈を加えること、これが妻木がこの論文を記そうとした重要な動機だったのではないだろうか。

この論文の内容が、コーネル大学建築科の教授たちによって明瞭に理解されたか否かは分からない。



しかし、彼らは妻木のこの論文に賞を与え、高く評価したのである。

### 3. 本論文の背景

この、妻木の論文を一読して思い当たるのは、明治12年に工部大学校の卒業論文として提出された、曾禰達蔵の「日本将来の住宅について」<sup>9)</sup>である。例えば、日本建築の起源に関わる部分に於いては、明らかにこの論文を参考にした形跡が見られる。

明治10年に出版された、英文『工部大学校学課並諸規則』<sup>9)</sup>には、造家学課の教授内容を「建築の歴史と芸術」と、「材料の性質と建築構造の原理」と大きく分類し、前者に於いてはエジプト建築から近代のヨーロッパ建築まで各様式が挙げられ、その中に「日本建築」が含まれている。日本建築の内容は、

「地方ごとの建築形態の大まかな特徴と多様性。これは、有名な建物を学生が訪れ、その優れたところを観察して、スケッチなどをするにより一層理解を深める。」

と解説されている。

このような、建築の歴史と芸術を教える目的は、「その国の建築の原理と美を深く知る」ためであり、「将来、その国のナショナル・アーキテクチャーとして最も良い特性を持つように仕向ける」ことなのであった。この様な、コンドルの教育方針に曾禰達蔵や妻木頼黄は影響を受けたに違いない。しかし、未だ当時は、工部大学校で系統だった日本建築史の教授が行われたわけではなく、学生たちは日本の建築の歴史の道筋を自ら造り上げねばならなかったのである。

さて、当時、日本の建築の起源について曾禰達蔵の論文、及び妻木頼黄の論文以外、如何に捉えられていたかを示す資料は現在のところ見いだしていない。また、彼らが参考とした原典があったのか否かも明らかではない。しかし、当時といえども、日本の建築の歴史は全く白紙の状態であったわけではなく、例えば、明治11年に内務省博物局が編纂した『工芸志科』<sup>10)</sup>に、木工、宮殿、門、垣、庫、棧敷、神社、仏寺、橋、などの起源と発達について示す記述が載せられているのである。この著は前年に開催されたパリ万国博覧会の出品物の解説を記すことを目的に調査した内容を纏めたものであるという。この書の原典は曾根もその卒業論文の原典として使用した、『日本書紀』『続日本紀』<sup>11)</sup>などにやはり依拠していると思われる。

妻木は日本の伝統的な建築について、特にその装飾については、むしろ積極的な評価をしているようである。これには、明治9年(1876)12月に来日し4カ月を日本で過ごしたクリストファー・ドレッサー(Christopher Dresser)の影響を無視し得ない<sup>12)</sup>。これは妻木はドレッサーの日本建築についての言葉をその論文中に引用していることから明らかであろう。またこのことはわずか数年の間に、日本趣味に深い理解を示していたコンドルやドレッサーを通じて、工部大学校の学生たちに日本の建築についての意識の変化があったことを物語っている。明治12年に提出された曾禰達蔵の論文においては、殆ど日本建築の装飾には積極的な評価が行われていないのに、4年後の妻木の論文にははっきりと日本建築の装飾に関する言及がなされているのである。

以上のごとく、妻木がコーネルに残した卒業論文は様々な示唆を私たちに与えてくれるに違いない。最後に、翻訳に当たっては出来るだけ正確を期するようにしたが、訳者の読解力や日本建築史の知識の拙さから、明らかに間違いと思われる箇所も見いだされるかも知れない。この点に関してご教示いただければ幸いである。

## 〈解題 註〉

- 1) 長谷川 堯『日本の建築明治大正昭和4 議事堂への系譜』昭和56年 三省堂等がある。また、近年では、博物館明治村『妻木頼黄と臨時建築局』展覧会カタログ 平成2年が詳細な履歴を明らかにしている。
- 2) 清水慶一「コーネル大学所蔵の小島憲之、妻木頼黄に関する資料について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1989年 堀 勇良・清水慶一「妻木頼黄の初期の履歴について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1990年。
- 3) 上記1), 2) を主要な資料とした。
- 4) 日本で妻木は官僚建築家として活躍、中央官衙建設計画のためドイツ留学。初期のアメリカ留学よりもこのドイツ留学が妻木の建築家としての立場を語る場合、しばしば注目されてきた。
- 5) 工部大学校の建築教育は 清水慶一「工学寮・工部大学校における建築教育」『国立科学博物館研究報告 E 類』1985年に詳しい。なおこの文献は日本建築学会 妻木頼黄文庫蔵 英文『工部大学校並び諸規則』“*IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING (KOUBU-DAI GAKKO) TOKEI CALENDER 1877*”。
- 6) 前掲「コーネル大学所蔵の小島憲之、妻木頼黄に関する資料について」。
- 7) “*THE CORNELLIAN 1878*” “*THE CORNELL ERA*” Vol. 11 Univ. June 13 1879 Morris, Bishop “*A HISTORY OF CORNELL*” 1962, “*CARLES BABCOCK; ARCHITECT CHARCHMAN AND EDUCATOR*”, Cornell Univ. 1977 “*EXIHIBIT CATALOG*”。
- 8) 曾禰達蔵「日本将来の住宅について」明治12年 なお本稿は小野啓子訳 『日本近代思想大系 19 都市 建築』1990年 岩波書店に掲載）を参照した。
- 9) 前掲。
- 10) 博物局編『工芸志科』明治11年10月 なお建築に関する箇所は黒川真頼が記している。
- 11) 前掲「日本将来の住宅について」の註。
- 12) 鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシック崩壊過程の研究』昭和59年 私家版。

# 「日本建築の成立」妻木頼黄

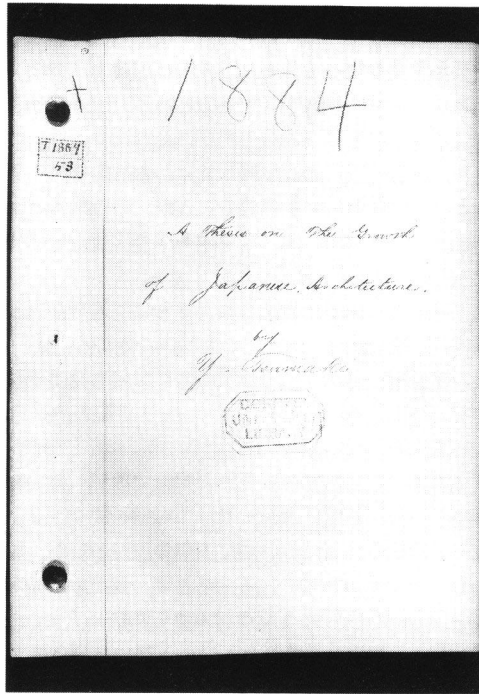
清水慶一・松波秀子 訳

凡例：訳文中（ ）は翻訳者が付加した。〈 〉は原文に含まれるもの。  
なお段落は原文に忠実にとった。

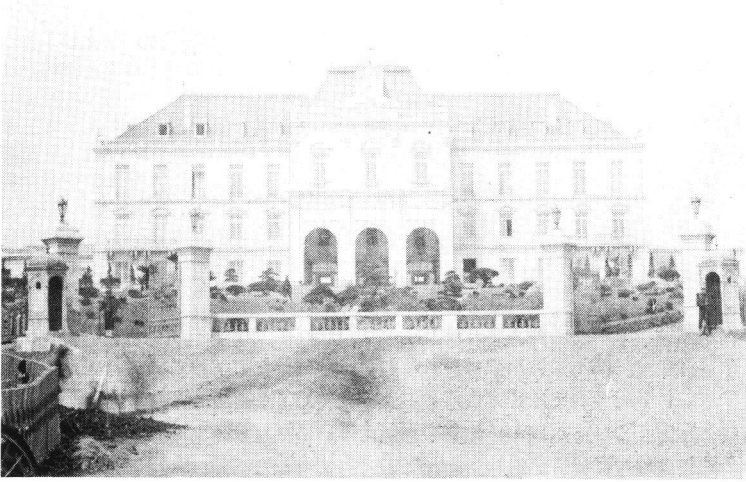
ごく最近まで、日本の歴史は世界に知られていなかった。

しかし、我が国が他国と通商関係を成立させてからは、日本の歴史や旅行書が広範に出版されるようになった。しかしながら、欧米の言葉で書かれたわが国の建築史における成果は未だほとんどない。このようなわけで、これを研究対象にして論述するように努めることとし、諸氏が（このテーマに）興味を持たれるものと確信している。日本の建築の起源についてはほとんど明らかにされていない。建築についての我々の知識は現代に偏っており、わけてもこのような昔の記録はほとんど見いだすことができないのである。

私の研究は、昔の史書と写本に拠っている。ここから得ることができる情報はあまり完全なものでは



参考図 1 妻木頼黄卒業論文表紙



参考図 2 日本の現代建築（論文の扉に掲載 写真は参謀本部 カペレッチ設計 明治 12 年 口絵）

ないが、日本の建築の起源と発展について理解するには何とか間に合うだろう。

一国の建築は、その国の人々の習慣に根ざし、気候、風習、習慣、人々の信ずる宗教に影響されながら、文明が進むにつれて次第に発展してきた。日本列島に住む人々は、魚撈、狩猟、農耕、に従事していたようだが、このうち農業が主要な営みとなった。人々は洞窟や木の枝で造った小屋の住居で満足していた時代もあったようである。伝説によれば、かつてテンショーコータイジンゴー〈太陽女神〉（天照皇大神）がスサノオ（須佐之男命）の暴力を逃れて洞窟に隠れたと言う。これは神話に違いないが、きわめて重要な出来事であった。木造住宅の起源に関しては、もう少しはっきりしている。太陽女神の子孫のアマツヒコダテノミコト（天津彦彦火火出見尊のことか）の時代にタオキネホネノミコト（手置帆負命）と弟のヒコサチノミコト（彦狭知命）が、森で木を伐り、自らの手で木造の宮殿を造ったと言う故事がある。

従って、洞窟住居の後に（木造の）小屋が建設されたことは間違いないと思われるが、紀元前 700 年の神武天皇即位以前の記録は、実際には何一つ確定できないのである。たとえ伝承に物語られていても、建物の起源を立証する古代の遺構は、単純な形の神社の他には何も見出せない。

当初の構造は、全て木造であったと思われ、これらは 2~3 世紀の内に自然に朽ち果てたか、あるいは、火災その他の災害によって崩壊したであろう。

我々が良く知っている歴史の中に記されているその不明瞭で理解し難い記述に説明を試みて、神社の特徴的な姿を詳細に検討して、いかにして日本人が神社の形態を成立させ、いかなる起源を持つものであるかを明らかにした。我々の建築の起源については不明な点が多いが、屋根の棟に載る 2 本の交差した垂木（千木）（図 1）が、わずかな手がかりとなる。これで、我々の祖先が住んだ小屋について知ることができる。つまり、伐り倒した木材を組み、1 組の材木を三角形に立て、上端は互いに持たせ掛けるようにして縄でしっかりと緊結した。1 組の交差した木材の下部には長い棒があり、この長い棒によって三角形のフレームは真っ直ぐにしっかりと固定され、その基部は地中に掘立とする。（屋根あるいは壁は）藁あるいは草の一種を用いて葺いた。小屋の形態は三角形のプリズム型で、側面には垂直な壁がな

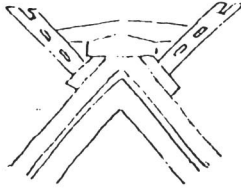


図 1

く、壁が屋根そのものであり、壁あるいは屋根にあたる部分が小屋を形成するのである。

このように解釈すると、上記のような形態の小屋が原型であると、推定することができる。しかしながら、世界のいかなる民族も、文明が進み一定の政体が成立する頃には、このような小屋に満足できないのは確かである。朝鮮の人びとから、彼らと同様の建物を建てる方法を教わるまで、我が国には、文字どおり真に建築と呼び得るものは持たなかったのだった。さらに、宮殿と神社が建設されたとされる神武天皇の即位以前には、建築についての明確な情報は何一つ見出されないのである。

朝鮮の人々が最初に来日したのは、神功皇后が朝鮮を征服した A.D. 200 年以降のことであろう。神功皇后は朝鮮を植民地とし、日本の支配下に置いた。そして、両国間の交流は継続して緊密に維持されたので、朝鮮の人びととの親しい交わりにより科学と芸術が導入されて、帝国の様式と芸術に多大な影響を及ぼしたのである。

朝鮮は、当時東方の文明国家として知られた大帝国の中国の東北沿岸部に位置する小さな王国で、初期には中国の支配下に入っていた。

朝鮮の社会的習慣、言語、芸術、科学は、中国の影響を強く受けた。従って朝鮮の人びとによって移入された科学や芸術は、実は外国に起源をもつもので、厳密に言えば中国を起源とするのである。この新たな（事物）の導入は、我が国の状況を変えた。A.D. 522 年には、サカムニ（ママ、釈迦牟尼か）によって金で作られたといわれる阿弥陀像が<sup>注1)</sup>、時の朝鮮の君主から献上された。

これが、日本への仏教の伝来である。大多数の人々が、この新たに導入された外国の宗教に反対した。

ミカド（御門）は、上記の仏像を焼き払い打ち砕こうとしたが、無駄であった。雲のない空から雨が降り、天から火炎が舞い落ちて、ミカドの宮殿をはじめ、新しい宗教に反対する全てのものが破壊されたのであった。これ以上の災難を防ぐために、ミカドは仏教を容認し、その後、ミカドの皇子である聖徳太子によって本格的に受け入れられたのであった。この時、朝鮮から僧侶が招聘され、完全な仏教様式の寺院を建てた。当時、仏教徒の義務として寺院が献納されたのである。古代初期には、僧侶は古代ローマの場合と同様に建築家でもあった。6 世紀には、数多くの寺院が建設され、仏教徒の義務として献納されたのだった。時の君主、ミカドは当時の都の大和へ建築家を集め、朝鮮の僧侶から中国風の建築を習得させた。そして宗教建築、土木、住宅建築をしっかりと習得させた後に、そこで知り得た科学<sup>注2)</sup>をようやく賞賛し始めたのである。しかしながら、明らかに、気候、風習、習慣が中国と異なるため、導入された建築は中国の雛型に忠実に従ったものとはならなかった。そして時代の流れとともに洗練され、発達し今世紀に至っている。以上が、日本の宗教建築に与えた最初の外国からの影響であった。それは、592 年の推古天皇の治世のことである。爾来、日本に多くの建築家が輩出した。なかでも飛驒地方出身の飛驒の匠は、その技量と偉大な才能で傑出していた。我が国の左右対称の建築の比例形態は、彼らによって創造されたのである。そして彼らは日本が生んだ最高の建築家であったと見做されている<sup>注3)</sup>。

これに反して、住宅建築は粗末で文明化されない形態のままであった。そしてその後の推移も緩慢で、中国その他の隣国の影響もほとんど無く、地方の農民の住いや職人の粗末な家は長い間ずっと、改良されなかったようである。

住宅建築は、外国の影響を受けずその土地に結びついて発生したものであって、今もアイヌの人たちの住居に見られるような、もともとこの島（日本列島）に住む人々の、原始的な小屋を起源として発展したものであるとほぼ間違いなく断言できる。11世紀初頭、時の皇帝欽明天皇は臣下の者に屋根は瓦葺とするように命じ、金持の者にも自費で瓦葺とするように命じた。

現存する建物はいくつかの種類に分類される。即ち、宮殿建築、宗教建築、都市建築、住宅建築である。

「屋敷」と呼ばれる壮大な建物は、宮殿建築と住宅建築の中間の建築だが、きわめて興味深いものである。

屋敷には主人と家臣が住み、その形式は時代とともに形づくられていった。現在、我々は、屋敷は宮殿建築と住宅建築の複合したものと解釈している。屋敷では中心となる建物（主屋）を家臣の私邸が取り巻いており、これから屋敷の起源を探ることができ、屋敷は、司令部のまわりに兵士たちのテントが張り廻らされる野営のキャンプ形式を原型とすると考えている。

歴史に述べられているところでは、屋敷は1300年頃足利将軍の時代に最初に建設されたとのことだ。ローマカトリック教がポルトガル人によってもたらされて急速に広まり、(カトリック)支持者は、幕府に対する反乱を扇動され、このため結局1609年に全ての外国人が帝国から追放された。しかしながら、この時期に外国人は要塞の遺跡にその痕跡を残した。大都市、城下町の多くの城郭には、ノルマン的な考えをある程度取り入れた特徴をまぎれもなく見出すことができるのである。

このヨーロッパの考えの影響は、上述のように城郭にのみ認められ、城郭以外の建築では重要な影響は何一つ受けなかったと考えられる。日本建築の本当に輝かしい時代は仏教伝来以降であって、優美な神社や将軍の霊廟建築にそれが示されていると言えよう。これらは国家が平穏な時代に造営され、その建物のすばらしさは、今も世の人々に賞賛されている。この隆盛は7世紀にわたって続いたが、1858年に日本は外国人の入国を認め（開国し）、鎖国に終止符を打った。

急速な文明開化をした国として、地球上日本に勝る国は無い。日本は世界で最も文化的な国家に肩を並べようと、壮大な目的をもって開化を進めている。この驚異的な文明開化は、我が国が必要とする事物を自由に導入してきた結果である。

このような状況の下で、日本にヨーロッパ建築が導入されたのは、17年前のことだった。この年、帝国政府は一新され、700年続いた古い習慣は一日にして捨て去られ、それまで長い眠りに就いていた日本に文明開化の夜明けが訪れたのである。

以来、建築の新しい領域が開け、公共建築と大邸宅の大半が準ヨーロッパ式<sup>註4)</sup>で建て替えられた。このような建物の中のいくつかは、私はモダン・ルネッサンスの好ましい建物を思い浮かべることができる。

これらの建物が、日本建築の第二の変革の基礎となった。時代の傾向に従って、仏教様式が盛んな時期は中心になっていた仏教建築は、現在では背後に押しやられ、これに代わってヨーロッパ様式が前面に打ち出された宮殿や都市の建物が建設されるようになった。

それでもやはり、我々は準ヨーロッパ式（擬洋風）に満足できなかった。また、国情が西洋とは異なるので、今後、構造と同時に、様式においても新しい帝国に相応しい建築の分野が開拓されていくであろう。日本の建築家には明るい未来が開けているに違いない。

上記は現代までの日本建築発達史の概要である。さらにこれを詳述していく。

次に、建築の各分野について考察することにして、現代の神道は、時の経過とともに諸々の細かい変化が生じて来ているにもかかわらず、他とは異なるきわだった形式の神社を建造している。美学的な観点からは、この種の建築は非常に見劣りするといわねばならない、そのような貧弱な印象を与えるのは、きわめて単純な形式で小屋の起源となった原始的な構造を直接反映しているからである。

この種の神社で最も研究する価値のある建築は、伊勢神宮と九段の神社である。伊勢神宮の建築は、最も純粹で最も古い形式を示していると言われる。彩色も彫刻も全く施されず、極めてわずかな金属の装飾がみられるのである。

これは小さな神社ではあるが、神道建築のあらゆる特色を示している。

本殿（チャペル）は、長さ 34 フィートで、周囲に幅 3 フィートの縁を廻らし、掘立（ほったて）柱で支持されている。幅 16 フィート、9 段の階段を設け、これを昇って入口に至り、階段と縁のまわりには高欄を廻す。高欄の親柱の頂部には「星の玉」（金製の宝珠）の飾りが付いている（図 2）。

手摺、階段、扉は、真鍮でふんだんに装飾され、外部の棟持柱、千木、突出した垂木も同種の装飾で美しく飾られている。九段の神社（図 3）は、現代的な特色を持ち、その規模と比例の美しさはきわめて優れている。なぜならば、この神社はまぎれもない神社形式（神明造）で建てられたにもかかわらず、



図 2

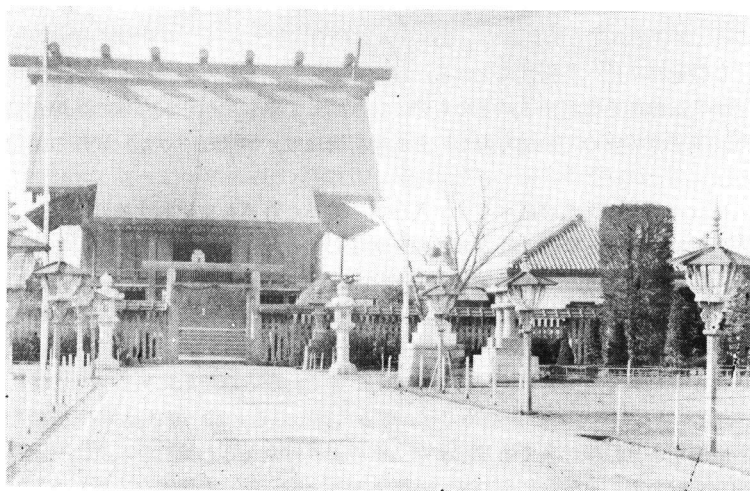


図 3

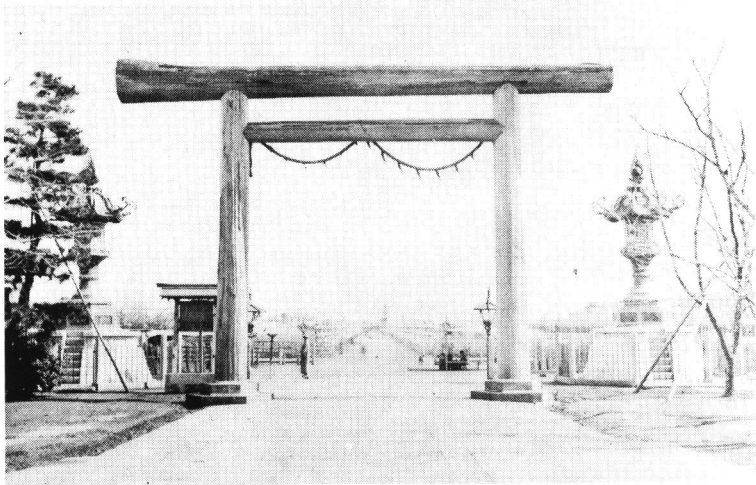


図 4

その細部は現代の芸術家によって洗練され、手加えられているからである。神社の境内はおよそ 100 エーカー余りで、大都会の中心部にあり、周囲は（普通の神社がそうであるように）柱に囲まれていないのである。この神社は、先の革命（維新）でミカドのために戦死した者たちの英霊を祀るために 1869 年に造営された。長さ約 1 マイルに及ぶ参道がずっと延び、両側には貴族たちが献納した 20 フィートもの高さの大きな御影石の燈籠がずらりと並んでいる。また神社（社殿）の前には、鳥居（鳥の止まり木）と呼ばれる独特の形をした門があり、聖域を（俗域と）区分している（図 4）。二面の傾斜面で形成される切妻屋根の社殿自体は、伊勢と同様の建築様式である。

これで神社建築の解説を終えたい。

軍事建築は、仏教建築に比べ芸術性に欠ける。また、どっしりとした重量感を与え、その建設年代も興味深い。芸術的な側面を重視するほどのものではない。しかしながら、日本の防御建築（城砦）には豪壮さがあり、ヨーロッパのどの地方のものとも全く異なり、中世ヨーロッパ大陸の最高の実例よりも華やかである。

勿論、日本人にはローマ人あるいはギリシア人が持っていた野望も文化的洗練性もなかったが、日本人はノルマン人の城に匹敵する堅固で壮大な城郭を建設したのだった。

地方都市の城下町にも大都市にも見られる城郭は昔は豪族の住居であった。これらは 15 世紀に建設されたといわれる。木造の防御構造物だが、まだ火薬や銃砲はなかった時代には、矢や槍から守るには充分堅固であったようだ。

城自体は、さまざま異なる高さの建築群を構成し、通常、塀と螺旋形にめぐらした堀に囲まれている。

城の外観は、威厳があり且つ壮大である。また、その規模は堂々としており、石垣を積み上げて高くし、民衆の一揆から守るのに十分な形をしている。さまざまな形をした巨大な多角形の石材の表面、モルタルを用いないでつなぎあわせた角と角、放物線のようにこの石垣の表面は仕上げられていて、角の



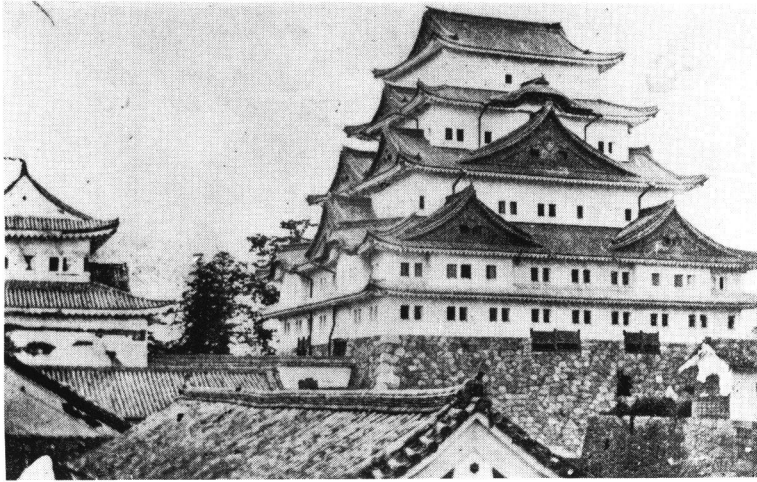


図 5

ところでもそり立っているのだ。そして、表面は次第に垂直に近くなっていく。石は通常の方法で積まれている。つきあわせた部分の角から放射するように目地がでていて、そして、相当に大きな御影石をふんだんに使用しているのである。

城閣本体（天守）を取り巻く土塁の上には、木造の防御構造物（櫓）が建っている（図5）。

この構造物の各層は、そのすぐ下の層よりわずかに後退しており、各下層の張り出し部分には廂を架け、さらに突き出した別の屋根（千鳥破風、唐破風など）で装飾され、破風には彫物が見られる。屋根は一般にわずかに反りがあり、寄棟の上に切妻が立ち上がっている（入母屋である）。つまり、屋根の棟端には破風がある。

最も優れた城閣建築は東京にあった城（江戸城）である。これはかつての権力者、将軍の居城であったが残念なことに火災で焼失した。

大名の城はその城主の格によって大きさが異なるが、いずれも同じような特徴を持つ。

実に不思議な話であるが、オランダ人がモデルとして導入したものとほぼ同様の石造アーチの橋を日本人は建設してきている。これらの橋は、300年も前にオランダから教わったものであった。

この（日本）列島全域に多くの寺院が分布しているが、東京と日光にある寺院から、その素晴らしさがはっきりとわかる。

帝国では、仏教建築は腐朽しやすい木材で造られており、このことが構造的に独自のきわだった特色をつくっている。

規模の大きさよりむしろその装飾の優美さと比例の美しさが顕著な建物である。

とりわけ屋根に特徴があり、はっきりとわかるのは屋根が曲線を描いているということである。

市街地は冬は火事に見舞われることが多いが、寺院は通常、深い柱で囲まれており、火災から免れて相当な古さを誇っている。しかし、普通の住居や市街地の建築は近頃建てられたものである。

芝にある公園は1877年まで浄土派の総本山の浄土宗寺院の敷地であった。同地には、歴代の徳川将軍



図 6

の幾人かの霊廟が、現存している。

この寺院の創立者、徳川家康は、これを彼自身と子孫の先祖を祀る寺として手厚く保護した。

芝の境内の三方は簡素な壁で囲まれ、残る一方の壁には正門と脇門を設けている。本堂は1874年に火災で焼失し、1623年建造の入口の正門だけが残っている。この門は木造でおよそ間口100フィート高さ80フィート、中央と両脇に開口部があり、これらは堅固な木造の柱で分割され、水平な梁で緊結されている。

入口の両側には、太い梁の下端までの高さに羽目板を打ち上げている。量感のある屋根はわずかに彎曲して前方に張り出し、(図6)に示すように、軒は持送りを重ねた組物によって支えられている。

細部の精巧さについては筆舌に尽くし難い。上部には軒先の無数の垂木の先端と下端が見える。上層はやや内側に後退して縁を巡らせ、幅広な柱で組まれている。柱間には羽目板を打ち、窓を嵌め、観音開きの扉を設ける場合も多い。

幾千本の持出し腕木が上方に徐々に突き出した組物が両端の妻まで廻り、組物はわずかに反りのある二軒垂木の重い屋根を受けている。屋根葺材は一般に、イタリアのタイルのような形状の灰色の瓦あるいは銅板を用いている。

この門には彫刻や精巧な装飾は何ひとつなく、鈍い赤色に塗られているだけである。装飾性の高い社寺を見た後では、これはきわめて単純なものに思えるかもしれないが、私は次のように考える。鈍い朱の地色に太陽光があたって輝き、軒、持送り、垂木が表面にくっきりとした陰影をつくり、周囲の杜の穏やかな緑がこれを和らげ、日本で見られる最も心地良い絵画的な構成をなしているのである。(図7)の浅草の寺院の雷門は、小規模であるが、芝の門とほとんど同様である。

右手の門は「仁王門」〈極楽の二神の門〉と呼ばれ、聖域への第一の門であり、相当な高さの石燈籠を両側に並べた参道に開いている。

石燈籠は七代将軍の廟のために大名たちが寄進したものである。この門に向かって「勅額門」あるいは「天皇の扁額の門」がある。時の天皇の筆になる七代将軍の名を写した金文字が刻まれた扁額が冠木

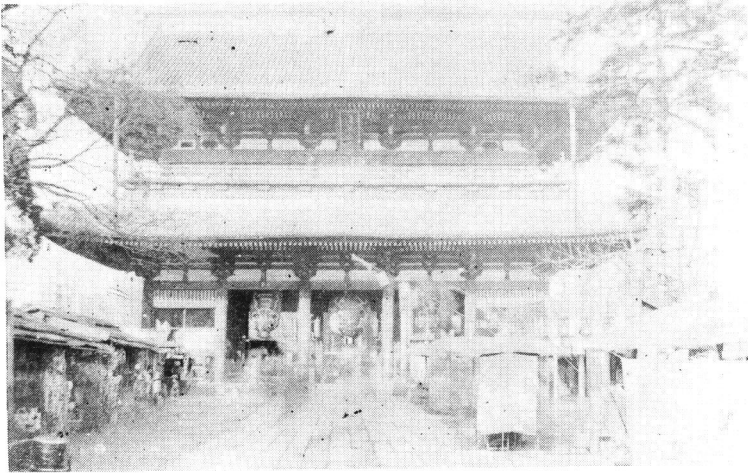


図 7

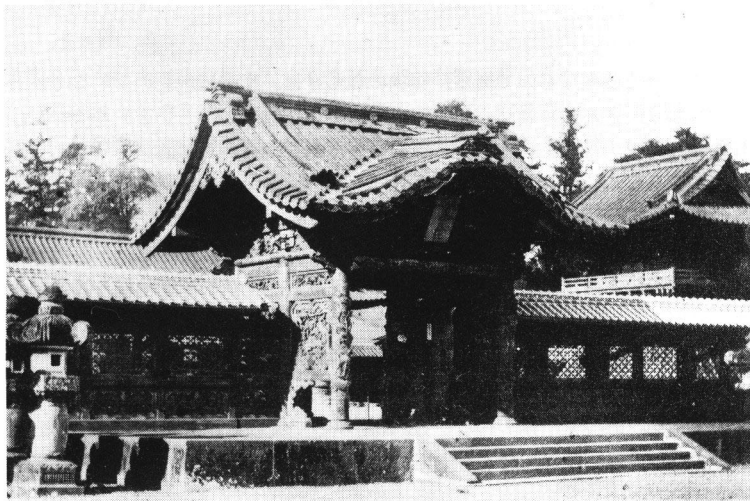


図 8

の上に架かっていることからこのように呼ばれている。

この門(図8)は龍の彫物を施した木造の柱で知られる。龍は柱に巻きつくように彫られ、当初は厚い朱塗の上に金箔が施されていた。門をくぐると石敷の庭があり、庭の周囲にはたくさんの青銅の燈籠がならぶ。燈籠は1661年のものからある。

(石段を)8段昇ると霊廟があり、庭の、残る三方には門を設けた回廊式の壁が廻らされている。回廊の下部は花崗岩もしくは閃長岩が積まれ、上部は間柱と繋ぎ梁で幾つかの区画に仕切られている。この壁の美しさは、区画ごとに、孔雀に松、野鴨、射手、色とりどりの菊水、不死を象徴した文様等が彫刻

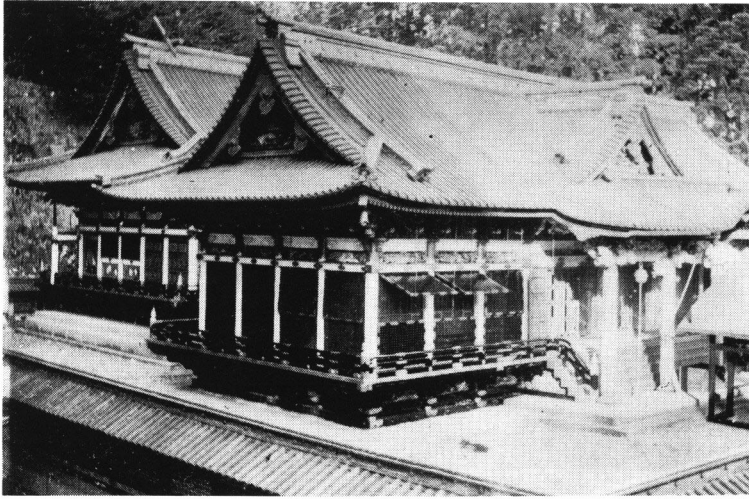


図 9

されたパネルにある。

これらの彫刻はきわめて繊細なものである。建物の美しさは、半分は色彩の美しさであり、残る半分は、形態の美であるから、どんなに素晴らしい写真でもこの建物（の美しい姿）を完全に伝えることはできない。大胆なやり方で、上手くいくということは先づあり得ない。装飾というものは、それぞれが個々の美しさを生かしながら彩色され、さまざまな部分が、完全な効果をあげるように組み合わせられるのである。

中庭には重厚な独特の形の屋根の架かった御堂（図9）が建ち、廻縁〈コーニス〉と鴨居と水平材の間の「欄間」と呼ばれる部分には、鳥獣の図を刻んだ彫物を嵌め、金箔の浮彫で様々な花の唐草文様を描いて優美に装飾している。

柱間（はしらま）には堅固な両開き扉を建て、腕木の組物で支持された周囲の回廊に向かって開かれている。回廊の外側には風雨から守るため木製格子の戸を付けている。

金地に唐獅子の装飾が内側の壁に描かれている。部屋の中で最も美しく洗練されているのは、（折上げの）格天井である。紙貼の格間には、金と青の地の上に飛龍が、あるいは、金のメダリオンの中に飛龍が装飾されている。

中央の平坦な部分には、天女（直訳すれば飛翔する天子）が金地に渋い色合いで描かれている。

主要な部屋や仏殿の欄間には色とりどりの花鳥の装飾がちりばめられている。

上記は「拝殿」と呼ばれ、供物が捧げられる場所である。

ドレッサー博士は、

「これほど色彩に富み、細部が美しく、象徴性の著しい建物を、私は未だかつて見たこともないしまた夢にさえ思ったこともない。ギボンズ（E. GIBBONS, 1648-1721, イギリスの木彫家）級の職人が木の彫物をつくり、アルハンブラ宮殿の（色彩を得意とする）画家が全力を尽くして色彩を施し、ほぼ完璧な形式に新たな魅力を加え、パンテオンの建築家が壮大な建築の構成において、細部を完璧に整えて適切な箇所へ配置させたとしても、私が今眼にしている建物ほど優れたものを生み出すことはできなかったで

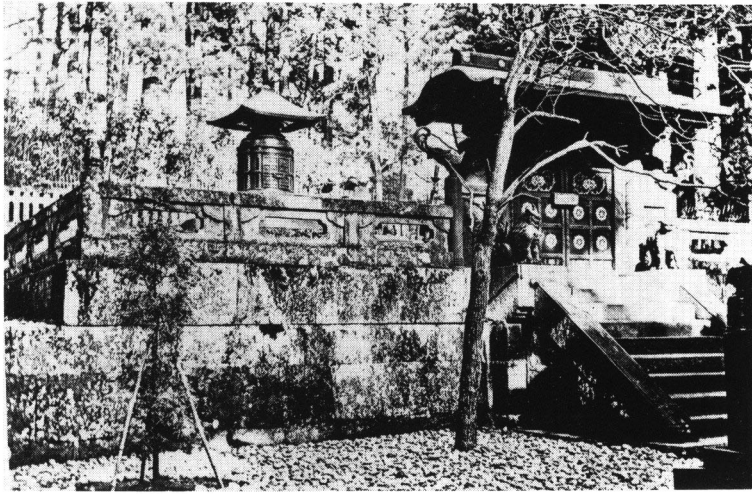


図 10, 11

あろう」<sup>(註5)</sup>と、述べている。

墓所は、御影石の石段を100段昇ったところにあり、石敷の長い庭が併設され、正面にやや小規模な別の小堂(拝殿)が建っている。墓(図10)は、青銅で一体として鑄出した鑄物で(装飾に)金の合金を加え、前面に低い御影石の台を置き、台には巨大な鶴型の青銅製の燭台、同じく青銅製の香炉、そして同じ材料の大きな壺を載せている。

この場所は周囲より15フィートほど高くなっていて、高欄を載せた石垣で取り囲まれている。入口(図11)は青銅の門をくぐる形式である。門は一体として鑄出した青銅の鑄物で、屋根も門と同様に一体の青銅の鑄物である。この鑄物の職人の技量は、彫刻の美しさ、デザインのバランス、仕上がりの繊細さにおいて素晴らしく、注目に値しよう。

この霊廟寺院は規模が非常に大きく意匠もきわめて美しく、他の寺院よりあらゆる点ではるかに優れており、日光の將軍の寺というより、むしろ神社(東照宮)は、日本で見出される建築のなかで、その荘厳さにおいて最も崇高な作品であり、装飾美術に関する限り世界にこれほどの作品を生みだした国はないのである。

それにしても日光の寺院は、きわめて大規模である。

このような寺院群の素晴らしさを、解かりやすく描写するには、到底私の筆力の及ぶところではない。なぜなら、装飾美術の熟練した用法、比例均整の単純な雄大さ、色彩の対比的な美しさが、芸術家の眼を麻痺させるからである。

日本では、五重の塔あるいはバゴダは他の仏教国ほどにたくさんあるわけではないが、たいへん美しい塔が東京の浅草にもある(図12)。

五重の塔は、全く木造の五層の建物である。各階ともその下の階よりわずかに後退しており、それぞれ裳階を廻して瓦葺の廂が張り出し、最上層の屋根には水煙が載っている。通常、木部は鈍い赤色の塗装を施し、彫刻を施した真鍮板で装飾されている。建物全体の高さは、水煙を除いて150フィートであ



図 12

る。中国その他の国のパゴダが八角形であるのに対し、日本ではほとんどの場合、方形である。各部分にちりばめられた手の込んだ金属板が真紅に塗られた木部ときわだった対比をなしている。

さて、仏教建築を考察したあとには、いよいよ最後に残しておいた住宅建築に論を進めなければなるまい。

前述の通り、住宅建築は中国および他の隣国からほとんど影響をうけていない。そして、あらゆる進歩は農耕民の慣習の中で幾世代にもわたってなされたのであり、おおよそ文明が進むにしたがって改善されてきたのである。

この住宅のうち、豪族の住居である「屋敷」は特に研究に値する。

前述の通り、「屋敷」は元来おそらく野営の施設（キャンプ）から発達したものであろう。即ち、全体の配置はきわめて単純で、引戸によって他室と出入りする部屋群から構成されている。

これらは、大きな梁間に屋根を架け、屋根にはテラコッタの棟飾りや隅棟飾り（鬼瓦）を付けている。一般に、妻は手の込んだ細工の彫刻で装飾され、軒が建物に好ましい効果を与えている。多くの場合、軒は、垂木が載った大きな桁あるいは木鼻が華やかに彫刻された持出し腕木によって支えられている。（屋敷には）車寄玄関が設けられ、建物全体を絵画的な姿としている。車寄玄関は、角柱を組み、角柱には線形が施されていることが多い。これに梁と垂木を天井を組み上げ、一般に流れるような草花文様が彫り込まれている。彫刻は実に繊細にしかも鮮明に刻まれており、極めて印象的である。

柱上には重い瓦葺の屋根が架かるが、この（車寄玄関の）屋根は（主屋の）大屋根の彎曲した勾配の延長にあり、彎曲した勾配が交差して形成する小屋根（破風屋根）でもある。

この交差してできる屋根の形状が棟の部分では凸に、軒の部分では凹に曲線を描く反曲線状の破風屋





図 13

根（唐破風）となる例は珍しくない。屋根の曲線は中程でなくなり、垂木の先端にある青銅の留金を見せるようになる。破風には彫刻が施され菊型の穴を明けた懸魚がついている。一般に、大屋根の両端（妻面）の上方は切妻で、下方は単に寄棟の一部となっている（入母屋のこと）。

言うまでもなく、絵画的な姿を創り出す破風の価値を、中世英国、ヨーロッパ大陸において見出すこともあるが、日本の事例ほど巧みに効果的に用いている国はないと思われる。（屋敷の）敷地の周囲の各々の建物の並ぶ側には高い塀を巡らし、入り口側には門（長屋門）を構える。本館（屋敷の主屋）を取り巻くこれらの建物はその屋敷の主人（豪族・大名）の家臣たちの住居であり、建物は主人の所有となっていた。

門を抜けると御影石の石敷の前庭に通じ、前庭に面して玄関車寄が主屋を取り巻く高い壁面から前方に張出している。往来から門を通して眺めると、玄関車寄の優美な姿が見える。一列に並んだ建物と、少し奥まって設けた木造の門（図 13）には、長い連続した瓦屋根が架かり、棟、軒、蛇腹で水平性が強調されているが、窓の堅格子や門の両脇にある出窓がこれに変化を与え、入口のたたずまいをつくっている。建物の壁体の基部には御影石の側石（がわいし）を五段積み、一階部分の壁は漆喰塗でなく灰色の平瓦を重ねないように木摺に貼り付けている。

平瓦は四半（菱形）に並べられ、目地を漆喰でなまこ型に盛り上げ、大胆で変わった市松模様になっている（なまこ壁のこと）。

概ね窓は矩形で、時には、建物の隅部でさらに門の両脇から等距離の個所に、線形を施した持送りで支えた出窓を張出することもある。

門自体は、きわめてがっしりしており堅固な外観をしている。門は、太くて頑丈な柱と梁で組まれて上層を支持し、重厚な両開き扉をつけている。通常の住宅の全体的な体裁は、ずっと昔から変わっていない。

この国では、壁は頑丈な軸組と同様の方法で施工される。梁と柱は仕口で組まれ、壁は竹小舞を縦横に渡し、木の楔で緊結し、幾層にも壁土を塗り重ね、漆喰を塗籠め、そして梁、柱、さらに壁面から突

出している垂木にも漆喰を塗籠めるのである。窓には（障子の外に）戸を取付け、防火への配慮がなされている。

この方式は土蔵に用いられており、この施工には何箇所も費やされることが多い。壁土を下地の上に何層にも塗るのだが、各層を塗るたびに、壁土を固めるための時間を置いてから塗り重ねるからである。最後に黒漆喰で、漆黒に表面を仕上げる。この構造は耐火性がある。

軒に張出した垂木にもまた分厚く漆喰を塗り籠めている。

これらの建物は、我が国の住宅建築の性質と形態を十分に説明するものと思われる。また日本の建築のなかで、最も外国の影響がなく優れた事例として位置づけられよう。これらは、日本以外に未だ地球上のどこにも用いられたこともなければ模倣されたこともないのである。

結論として、私は、25世紀にわたってなぜ我々がこのような粗末な木造の構造にずっと住んできたかという理由について私の見解を述べたいと思う。おそらく、これを解釈するのは、外国人にとってかなり難しいことであると思われるが、私はこの疑問をおおいに掘り下げ、これまでの調査の結果、深い確信を得るに至った。

上記の理由を説明するのは困難なことではない。これは、順序だてて説明するのが賢明であろう。理由は以下の6点である。第一に：祖先の習慣に適したもともとの原始的な建築を起源とする小屋であったこと。第二に：木材が豊富に供給できたこと。第三に：石材は輸送上不便であったこと。

城郭はほとんど近づけないような山上に巨大な石塊で建造されたが、これは当時の大名の大権力と英雄の圧政によるものである。第四に：煉瓦とセメントの製造、そしてモルタルについての知識がなかったこと。石工事は、すべて漆喰を用いて積まれるか、あるいは目地材を使わないで積まれたのである。第五に：アーチの用法を知らなかったこと。一説では1500年前に建造されたといわれるアーチの橋梁があることはあるが、これは、下水渠やヴォールトなどにアーチを使うことを知っていても、建物には用いなかったエジプト人の場合と同様である。

最後に：何百年にも及んで封建制度が長期に続いたため、人々は旧習を守り平穏な世界に暮らしてきたこと。以上のような理由である。こうした理由は現在の文明開化した日本ではもはや通用しない。日本人が他の国のことを知らなかった頃は、自国の芸術に誇りを持ち、それは卓越したものだと考えていたが、諸外国の建築を知ると、自国の壊れやすい木造の構造物を劣ったものと考えようになった。こうして自国の芸術を改善していこうとする気運が起り、むしろ新たな洋々たる建築の領域が彼らの前に開かれたのである。合衆国こそ、長い眠りから眼を醒させてくれた国なのである。我々は諸外国の良いところを取り入れ、自国の建築を改善しようと苦闘している。日本国に幸いあれ。今、非常な研鑽を積み、猛進している日本の建築家たちが、すみやかに完璧な域に達成せんことを念じている。

#### 〈訳注〉

注1) 妻木の英訳の誤りか、あるいは彼の歴史認識の勘違いであろう

注2) ここでいう科学 (science) とは、技術 (technology) の意と思われる

注3) 妻木家は美濃に領地を持つ旗本であり、優れた大工集団であった飛騨の匠の伝説を聞いていたと思われる

注4) Semi-European Style: 擬洋風と訳した

注5) この辺りの記述は浅草の浅草寺と日光の東照宮が混乱しているようである。あるいは妻木は寺院建築の様式を論じているのであって、特定の建物を対象としなかったと解釈できる